

2026年1月25日 第二礼拝

説教題『善い業を始めた方への信頼』使徒16章11～15節、フィリピ1章3～6節

主任牧師 加藤 誠

「あなたがたの間で善い業を始めた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」(フィリピの信徒への手紙1章6節)

使徒言行録が教えてくれている大切なことの一つは「聖霊の導き／伴い、聖霊の力なしに弟子たちは何もできない」ということです。例えば、あのペントコステにおいて聖霊が注がれるまで、弟子たちは部屋の中にこもったままでした。彼らは熱心に祈っていましたが、扉を開けて人々の間に身をさらしイエスの証人として立つ勇気を持てずにいました。熱心な祈りは大切ですが、それ以上に大切なことは聖霊の注ぎです。彼らがエルサレムの都の中で大胆にイエスの出来事を語る者とされるために、彼らは聖霊の注ぎを「待たなければならなかつた」のです。間違っても「自分たちの熱心な祈りがペントコステの出来事を起こした」などと思ってはならないのです。

その後、ペトロもステファノもパウロも皆、聖霊に満たされた時にイエスの証人とされています。4:8「そのとき、ペトロは聖霊に満たされ…」、7:55「ステファノは聖霊に満たされ…」、13:9「パウロ…は、聖霊に満たされ…」。彼らの個人的な信仰の熱心さや勇気ではない。聖霊が彼らをイエスの証人とするのです。さらに10:38～39でペトロはこう語っています。「神は、聖霊と力によってこの方(ナザレのイエス)を油注がれた者となさいました。イエスは…人々を助け…いやされたのですが、それは、神がご一緒だったからです」。主イエスも(!)聖霊の力によって神と一緒だったから神の働きをすることができた(ルカ4:14参照)。まして私たちはなおさら聖霊、神ご自身の力が注がれて、はじめて証人とされることを覚えたいのです。

もう一つ、使徒言行録が私たちに伝えている大切なこと。それは「私たちの間で善い業を始めた方(神)ご自身が、良しとされる仕方で、ふさわしいと考えた時に、ご自身の善き業を成し遂げられる」ということです。使徒言行録は、その善き業を始めた方に信頼し、善き業に仕えていこう!…と、私たちを励ますのです。

使徒16章は、パウロたちのフィリピ伝道の報告であり、基本的にパウロたちを主語にした文章が並んでいますが、しかしフィリピ伝道の本当の主役は「善い業を始めた方」=「主なる神」です。フィリピは当初、パウロたちの伝道計画に入っていました。パウロたちは他の場所に行くつもりでしたが、6節「アジア州で御言葉を語ることを聖霊が禁じ」、7節「ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの靈がそれを許さなかった」ために、当初の計画変更を余儀なくされました。具体的に何があったのかは分かりませんが、自分たちの計画、思いが妨げられて、頭を抱えて落胆しているパウロたちの姿が想像されます。しかしその落胆の中にマケドニア人の幻が示さ

れた時、パウロは「伝道の主役である神さまの計画がフィリピにある」と悟ります。やがて、このフィリピの町に生まれた小さな教会が、伝道者パウロを終生最後まで支える教会となつたのでした。フィリピの信徒への手紙を読むと、パウロがどれだけフィリピの教会の人々に祈りで支えられ、献金で支えられ励まされ、感謝し喜んでいるか。パウロの祈りと愛が伝わってきます。ただ今回ハッしたのが12節「この町に数日間滞在した」の言葉です。時間的長さではない。「たった数日間」の出会いと交わりであつても、そこで「善き業を始めた方の恵み」が一緒に共有される時、キリストの教会が起こされるのですね。主の恵みの不思議は人間の計画をいつも超えるのです。

しかもその「数日間の伝道」は「苦難の数日間」と呼ぶべきものでした。神を崇めるリディアと出会って彼女の家族がバプテスマを受けたまではよかつたものの、占いの靈に取りつかれた女奴隸にしつこく付きまとわれ、「たまりかねて」彼女をその靈の支配から解放したことで、彼女の主人たちから因縁をつけられて投獄され鞭打たれてしまいます。なんと不当なことでしょうか。しかしその夜、パウロとシラスの口からは不思議なことに賛美があふれます。鞭打たれた傷の痛みで賛美どころではなかつたでしょうに…。この二人の賛美は同じ牢獄にいる囚人たちの心を慰めるものとなり、夜中の地震で自らの責任を感じて自害しようとした看守の命を救うものとなり、彼とその家族が主イエスを信じてバプテスマを受ける奇跡へとつながつていったのでした。

それにしても、あの牢獄にあって体中に鞭打ちの痛みが残る中で、パウロたちの賛美はいったいどこから生まれたのでしょうか。そのヒントは、パウロがフィリピ教会の人々に書いた手紙の言葉にあるように思います。パウロはこう語っています。「あなたがたの間で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」（フィリピ1:6）。この「成し遂げてくださる」という言葉はニュアンスは「成し遂げ続けてくださる」です。「善い業を始めた方」は「良い時も悪いときもずっと働き続けている」からです。「パウロたちが牢獄にぶち込まれた時は休まれていたけれど、そのあと目覚めてパウロたちを助けてくださった」ではありません。パウロたちが因縁をつけられた時も、鞭打たれた時も「善き業を始められた方は働き続けていた」のです。私たちは自分の主觀や感覚で判断してはいけない。私たちが主の導きに従っているのなら、どんな困難の時でもい、そこには「善き業を始めた方の伴いがある！」。フィリピに導かれたのは自分たちの計画ではない、神ご自身の御計画だ。であるなら不当な鞭打ちと投獄の中にも神ご自身が働き続けておられる。その確信がパウロたちをして賛美を歌わせたのではないかでしょうか。「善き業を始めた方への信頼」が彼らの賛美の秘密だったのです。

暗闇あふれる世界の中にあって、この「善き業を始めた方」への信仰を日々聖書からいただきながら、私たちも感謝と賛美をもって主の業に励んでいきましょう。